

川口特別伝道集会

求めよ、尋ねよ、門を叩けよ

—マタイ伝第7章1～11節—

1979年6月17日

小池辰雄

教員生活五十年 キリスト道 宗教は文化文明の土台 偽善 「はいっ」と言って聞き従う 我
 執という梁木 無者 無即是有、有即是無 義と愛 キリストを求める キリスト中心の求め
 キリスト主体 十字架と聖霊 門の向こう側は聖霊の世界 宗教の原始力体 100%に降参 真
 理の最高の表現はドラマ 空気は無条件 無限無量の聖霊

【マタイ7】

1 なんじら人を審みくはな、審かれざらん為なり。2 己おのがさばく審判さばにて己おのれもさばかれ、己がはかる量りにて己も量らるべし。3 何ゆえ兄弟の目にある塵ちりを見て、おのが目にある梁木うづほりを認めぬか。4 視よ、おのが目に梁木のあるに、いかで兄弟の目より塵をとり除かせよと言ひ得んや。5 偽善者よ、まず己が目より梁木をとり除け、さらば明らかに見えて兄弟の目より塵を取りのぞき得ん。

6 聖なる物を犬に与うな。また真珠を豚の前に投ぐな。恐らくは足にて踏みつけ、向き反かえりて汝らを噛みやぶらん。

7 求めよ、然らば与えられん。尋ねよ、さらば見出さん。門を叩け、さらば開かれん。8 すべて求むる者は得、たずぬる者は見だし、門をたたく者は開かるるなり。9 汝等のうち、誰かその子パンを求めんに石を与え、10 魚を求めんに蛇を与えんや。11 然らば、汝ら悪あしき者ながら、善き賜物たまものをその子らに与うるを知る。まして天にいます汝らの父は、求むる者に善き物を賜たまわざらんや。

●教員生活五十年

この3月の末日をもって、私は50年間の教員生活に終止符を打ちました。外的に言いますと、私の勤めていたD大学では、創業時代に関わった人は75歳をもって停年とするといふので、停年で辞めたわけです。中学・高等学校の校長は別に停年がないので、続けようと思えば続けられるけれども。しかし、内的に言いますと、私はもうギリギリのところに来た。75歳となれば、いくら私は元気でも、後いいところ10年ですから、ボヤボヤしてら



れないというわけです。

本当は70歳で辞めたかった。名誉校長の天野貞祐先生にそのように申し上げたら、先生も一応承諾してくださった。けれども、70歳になったら、

「ダメだ。他に代わる人がいない」

ということ、更に5年間、校長を続けた。75歳になって、私は真先に天野先生に

「今度は辞めさせていただきます」

と手紙を書いた。先生は快くそれを受けてくださいました。

今、天野先生は95歳です。もう外出はご無理ですが、ご自宅におられます。天野先生は内村鑑三を非常に尊敬しておられて、ことに

「内村先生の『後世の最大遺物』という本が自分の人生観をつくった本である。また、ヒルティーの言説によつて自分の人生観ができた」

と言っておられる。私は天野先生のお宅に月に一回、お話を承りに行つて、いろいろ親しくお話をした。先生は、

「僕も本当は君のような信仰をもちたいんだけどね。私のは、哲学の畑だものだから、哲学的信仰とでも言うのかね」

なんて、笑っておられました。非常に謙遜で、しかし、真理のためには本当に勇敢に戦われた。『道理の感覚』という本を書かれて、あの時は軍部に相当睨まれたわけです。

3月31日にD学園の理事・評議員会というのがありまして、これが私にとって最後でした。上野で退職者の送別会がありまして、会が終わって外に出ると、夜桜が全く桜花爛漫として、桜のパラダイスみたいな情景でした。私はああいう素晴らしい夜桜を未だかつて見たことがないと言つていいでしょう。心あつてか、一陣の風が吹き来たって、霏々紛々と桜の花が散った。私はその花びらの散るのを浴びて、

「ああ、私は本当に今日この花と一緒に教育界から散つたのだ」と思った。

「散りかかる桜とともに散りにけり」

という、句でも何でもないんですが、そんなことで教育界を去つたわけです。

私は教育界を去つたわけですが、もちろん、その前に、もう既に1940年から自宅で集会を続けて今日に至っている。また、『著作集』の出版も1975年から始めている。これからは、私の気持は、誠に托鉢僧的な気持で生きていきたいと思っております。

●キリスト道

今日は、さきほど読まれたところをきつかけにして、自由にお話しさせていただきます。前に『ハレルヤ』誌41号で「求めよ、尋ねよ、門を叩けよ」という文を書いておりますから、これはご参考にお読みになつてください。なにも今日は、それをお話しするわけではあり



ませんが。

新しい方に申し上げますけれども、「キリスト教」というのは、「教」という言い方がそもそも私は気に食わない。そこで私は「キリスト道」ということを言っている。本来、日本人は道の民である。茶道、剣道、柔道、弓道、書道という。身に付ける真理を「道」という。道というのは頭で考えられたような真理ではない。身に付いてないものは偽物うそものです。観念的には真理であつても、本当に身に付かないことには、それは道とは言えない。キリストは、「自分は教えである」とは仰らなかつた。

「我は道なり」

と言われた。日本人には「キリスト教」なんていう言い方よりも「キリスト道」ということです。「仏教」だつてそうです。本当は「仏道」なんですよ。私は曠愛新書第6号に『キリスト道』というのを書きましたけれども。

では、キリストはどういう道かというのと、「父」への道です。我々はキリストを通つて、父なる神へ行く。

「我によらずば父のもとには行けない」

とはつきり言つておられる。宗教の世界はもちろん、宗教の絶対境というのは、いろいろな宗教によつて、それがインチキな宗教でなければ、共通したものがありません。けれども、聖書において啓示されたところの、この驚くべき神は、これはキリストを通らなくてはそれのもとへは行けない。

聖書は神さまが著者です。神さまが著者で、キリストはその聖書の主人公です。だから、

「聖書は我につきて証するものなり」

と旧約聖書のことをキリストは言われたが、新約聖書もちろん、それよりもはるかに素晴らしい意味においてキリストを証している。説明しているのでも何でもありません。証している。証書あかし、証の書なんです。証でなければ人の心は打たない、ただ思われたような世界では。

「わが証者となれ、わが証人となれ」

と、キリストは使徒行伝の始めの方で言つておられる。使徒行伝1章8節に、

「然れど聖霊なんじらの上に臨むとき、汝ら能力ちからをうけん、而してエルサレム、

ユダヤ全国、サマリア、及び地の極はてにまで我が証人とならん」

「地の極にまで我が証人となる」

と。証人でも証者でもいい。キリスト者とはキリストの証者のことです。ただ、

「キリストは贖い主である」

という命題を信じているのがクリスチャンではない。キリストの証者でなければ、キリスト者とは本当は言えない。ところが今のところレットル・クリスチャンがいかに多いことか。



●宗教は文化文明の土台

日本はレツテル大学生がいっぱいいる。もう、大学なんかどんつぶしたらいい——私は勝手なことを言うけれども——大学が多すぎる。その点はさすがにドイツは偉い。戦争に負けたつて、彼らの魂はしつかりしていた。大学というなら、本当に大学生らしく打ち込んだ勉強をしなければならぬ。それを何ですか、パチンコだ、マージャンだ、ゴルフだ、何だかんだと。私は正直、日本はもう滅びると思っています。政治的の話はその結果となる話で、このままいくと精神的には滅びてしまう。小学校から大学に至るまで、教育者がダメです。私は全国高等学校校長会議で三度言った。

「校長さんがた、山に籠もつて、まず瞑想してから教育を始めたらいかがですか」と。私は恐いものはないから、文部省のご連中がいたつて、一向差し支えない。

「教育者がまず本当に宗教心をもたなかったら本当の教育はできない」ということも言いました。宗教は文化文明の土台でなければ、20世紀の文明はひっくり返つてしまう。根つこのない大木みたいなもので、良さそうに見えるけれども、いつかはガターンと倒れてしまう。根つこが宗教の世界ですから。

幹は道徳の世界。根つこは宗教です。これは次元が違う。幹は見える世界。根つこは見えない世界です。それから、枝があり、葉があり、花が咲き、果が実る。枝葉花果、これは文化文明の世界です。宗教の土台のない道徳なんていうものはいかにダメかということ、私たちの教育で既にもう試験済みなんです。私たちは道徳教育を受けてきた。悪くはない。これからも大いになすべしです。けれども、そこは限界がある。その限界を突破しなければ、この宗教の世界に入れない。行き詰まらぬと入れない。ソクラテスが

「私は何も分からないということが分かった」

と言った。知の世界で行き詰まった。これが本当の

「無知の知」

ということですよ。無知の知の世界に入ったら、ソクラテスの知は知行一致の世界で、彼は本当にそのような実存をしました。

●偽善

「私は何も知らないということが分かった」

と、ゲーテが『ファウスト』の最初の告白のところ、ソクラテスのその言葉を借りて、ファウストをして言わしめている。ところが、これはギリシア的な角度です。今度は、ユダヤ的な角度は何かというと、

「噫われ悩める人なるかな、此の死の体より我を救わん者は誰ぞ。」(ローマ書7・

24)

という告白になる。やろうとすると、どうしても善いことができない。相対的に一時的



にはできるけれどもダメだ。パウロがローマ書7章でその苦しみを言っているわけです。善を思うものはあるけれども、悪の法があつてどうにもならんと。人間には良心があるけれども、良心の声を踏みにじっていることがしばしばである。外側は踏みにじらないような顔をしているけれども、実は内側では踏みにじっている。これはお互いさま、我々は罪びとだから。

そういうのは、行の世界で行き詰まっている。実存の世界です。行いができない。無行なんだ。パウロは実は、大いにできると彼は思っていた。彼はパリサイ人ひとですからね。ユダヤ教のチャンピオンで、

「律法の義おきてにつきては責むべきところなし」

と、自ら公然と言うことができた。即ち、モーセの十誡、およびいろいろな戒めや律法を——人体の骨の数ほどある——それを大いに知つて拳けん々けん服膺ふくようして、立派だと思つていた。これが神に仕える自分の誇りだと思つていたわけです。そのパウロの熱心は結構なんです。それ自身は悪くない。いわゆる偽善ではない。ところが、キリストから言わせると、そういうのが偽善なんだ。

彼がキリストを信ずる者を迫害していたから、復活のキリストがダマスコ途上で、

「何ぞ、我を迫害するか！」

と、パウロをひっくり返してしまつた。彼は三日三晩、目が見えず、耳が聞こえず、ものが言えずということになつた。靈に撃たれてしまつたわけです。アナニヤという靈的な人物が彼に按手あんしゅして——もう、そのことはパウロにも示され、アナニヤにも示されている。使徒行伝9章のところを読んでください。不思議なことです。何も不思議ではない。靈的な世界はそうなんです。パウロには

「あそこへ行け」

と。アナニヤの方には

「こういうのが来るよ」

と——アナニヤの按手を通して、キリストの靈が伝わつた。これはキリストの靈ですよ。直接、神ではない。そうしたら、

「我が目より鱗うろこの如きもの落ちたり」

と、彼はその時に開眼した。

人間は本来、本当の行はできないということに、彼は気がついた。

「噫われ悩める人なるかな、此の死の体からだ」

と彼は言った。それが本来のパウロの現実なんです。大いにできると思つたが、大間違ひだった。今までの自分の義なんか、塵芥ちりあくたのごときものである。救うのはキリストの義だと気がついた。



●「はいっ」と言いつて聞き従う

「義」という言葉は「正義」ではない。間違えては困る。いわゆる正義という徳目ではない。神さまの意志を100%に行うことが「義」なんです。お父さんやお母さんの言うことに

「はいっ」

と言いつて、100%に聞き従つて行動する子供が、本当の親孝行という。そうすると、間違つたことを言つた時に、お母さんやお父さんは

「自分は悪かつた」

と後で気がつく。逆に、お父さんやお母さんを行いによつて正すことができる。それだけの子供がいるかね、今は。すぐ反抗して、どうのこうのといろいろなことを言う。

私の兄は腕白小僧で、喧嘩のがき大将みたいな力ある兄貴でしたけれども、内村鑑三先生の影響によつて信仰に入つてからは特に、お母さんの言うことを本当に

「はいっ」

と聞いて、よく実行していました。それ以上に実行していました。私はその姿を今でもよく覚えています。彼の終りの数年というのは本当に立派でした。

お母さんがもし間違つたことを言つたならば、後から「自分は悪かつた」と、こう思う。それが本当の担いと言うんです。それだけの気魄の青年がいるかね、今は。日本の民主主義なんていうものは全く身勝手主義だよ。

私は昨日も世話をやいてしまった。シルバーシートに若いのが腰掛けて平気な顔をしている。女の子でもそうです。

「何だと言うんだ、前に白髪の人がいるじゃないですか。あなたは代わつてあげな

さい。ここはシルバーシートですよ」

と。しぶしぶ立つよ。そういうことを言う人がいないじゃないですか。私たちの学生時代には、そんなシルバーシートがなくなつて、自然に立つたもんです。

東大の卒業生が卒業20年になるというのでクラス会を開いて、私を招いてくれた。私は喜んで行つた。その時に、私に一席させたから、いろいろなことを言いました。

「あなた方の時代は、君たちは立派だった。今の東大生を見ると、私はこれは一体、東大生かと思う。後輩に向かつてはつきり言うべきことを言つてもらいたい」

と。もう、こんなことでは、日本は「経済大国」だなんて、何ですかこれ。道德宗教の大国になつてもらいたい。経済大国でも、これは道德宗教では三等か四等だよ。むしろ、いわゆる野蛮人の方がもつとしっかりしているかも知れない。これでは滅びる。こないだから、政治の世界でガタガタ、ガタガタやっている。何ですか、あれは。テレビを見るのも嫌になつてしまう。散々そういうことでね、まだまだ言いたいことがたくさんあるけれども、もうよそう、ひとのマイナスなんか言うのは。だから、さつき言つた

「審くな」



ということですが。私も審きません。

パウロは自分のことを

「罪びとの首」^{かしら}

と言いました。自分は悪かったと。迫害して、ステパノの殺人までも善しとしたパウロですから。それはやりきれないんだ、パウロとしても自分を省みたら。あのステパノに対して本当に申し訳なかったと。しかし、ステパノのあの殉教の死がパウロをひっくり返す、知らざるところの根底になったと思います。

●我執という梁木

3 何ゆえ兄弟の目にある塵を見て、おのが目にある塵を認めぬか。4 視よ、

おのが目に梁木のあるに、いかで兄弟の目より塵をとり除かせよと言い得んや。

自分の目に梁木があるのに、自分の目からその梁木を取り除かなければ、人の目の塵を取り除くわけにいかん。我々は自分で梁木を取り除くことができますか。「梁木」というのは我執ということ。我執が煩惱の中心です。エゴイズム、これは誰でも持っている。ある意味において、エゴイズムがなければ、人間は展開していかない。自分を保持し、自分を進展させていくという、自己中心というやつ。けれども、手放しの自己中心は困ったものだ。

「大いに自主的でなければいかん」

と、「自主だ、自由だ」というけれども。これはみな頭に「自」という字がついている。

その我執という梁木は、いくら取ろうとしてもとれない。難行道の方では、禅宗の悟りで大いにそれをやる。ある意味においてご苦労さんなはなしだ。もちろん、それは悪くはない。結構なはなしです。けれども、福音の世界はもっと簡単で、もっと素晴らしい。

それでは、キリストさまは、イエスは我執はなかったかという、彼も大いに可能性があったんです。というのは、受肉して、我々と同じ感情をもち、普通の人間だった。だから、

「神の子」

なんていったって、地上にいる限りは、キリストはいろいろな危険性をはらんでいた。危機的存在だった。

「キリスト」

という、みんなもうでき上がってしまった「神の子」で、もうどうにもならないかと思う。そうじゃないですよ、彼は。

「弱さを思いやることのできる人である」

ということは自分に弱さをもっていたということ。ただ、キリストは我執に囚われなかった。我執という感情は彼も知っています。でなければ、あれだけ多彩な言葉は発せません。

「兄弟を憎む者は殺したるなり」



と言う。憎むという感情もキリストは知っている。色情という感情もキリストは知っている。でなければ、ああいう言葉は出てこない。けれども、彼はそれを乗り越え、決してそれに支配されなかった。いつも、神さまに自分を明け渡ししておられた。

●無者

「汝の御意を成させたまえ」

というのは、キリストの祈りはいつも神さまなんだ。神さまとの祈りです。キリストはいかなる人でしたかという、祈りの人であった。祈人なんだ。祈人は即ち「祈入」となる。神さまの中に自分を投げ入れて祈った人です。この「祈り入る」ということは、普通の牧師さんは言わないでしょうね。「祈り、祈り」と言っているかも知れない。祈り入ることは、祈り入るとは

「自分をキリストの中に入れる」

こと。父の懐の中にすぐ彼は入ってしまう。いや実にいつも懐の中にいるようなわけです。新しい方に申し上げるけれども、私が言っているこの福音の世界はもの凄い世界です。深さも、幅も、高さも、無限無量なものなんです。

「これこれどうぞ」

なんて、説明し切れるものでは絶対にありません。だから、私はお説教なんかしているのではない。この世界に入ったら、本当に楽しいし、力が来るし。さっきの司会者の

「もう、どうにでもなれ」

という気合がそうなんです。

「神さまが、キリストが一切を為してくださる」

と言って、傍観しているのではない。自分を投げ入れている。投げ入れると、キリストが一切を為したもうんです。

「我を通して、御意を成させたまえ」

なんです。

「御意の天のごとく、地にも成させ給え」

と祈るけれども、「地」とは自分のことですよ。

「自分において現じてください」

と。キリストはいつも100%に神さまの中に自分を投げ入れて、そして、

「どうぞ、お使いください」

と祈られた。だから私は、キリストは自分をなくしている人間だから、

「無者」

と言っている。無私、私のない人、無私者だから、無者という。虚無ではない。神の中に自分が隠れてしまっている。神自身が隠れているのではないですか。



「隠れていたもう神に祈れ」

とキリストは言っている。隠れていたもう神の中に自分が隠れている。

「空くうの空なるかな」

という言葉があるが、両方とも空になってしまっている——これは半分冗談だけれども、誤解しないでください——

「空空然たるものが神・キリストであるなあ」

ということですよ。隠れて見えない、聞こえないもの、それを「空」と言おうが、「無」と言おうが、いいですよ。

●無即是有、有即是無

「空くう即是色しき、色しき即是空くう」

と言う。これは素晴らしい言葉です。福音の世界だと、これが本当につかめるんです。福音の世界でなければ、これは本当はつかめない。「空」というのは「無」でもいい。

「無即是有、有即是無」

でもいい。この場合の「空」と「色」は、「即」と言いますが、ちがうですよ。空は空、色は色なんです。無は無。有は有。空とか無は絶対なんです。色とか有は相対なんです。もうひとつ別な言葉で言うと、

「絶対は相対である。相対は絶対である」

ということですよ。色界というのはこの現象界のこと。現象界の奥の世界が空、無です。空と色、また無と有は相対概念ではない。空と無だけが絶対なんです。色と有は相対です。では、どうしてそれが即なんですか、と言いたいわけです。

この「即」を見ようと思ったら、キリストを見てください。キリストという方は自分を何者としなかった「無」である。ところが、キリストは無において、完全に彼は現象しているんです。キリストは本質的に無ということは、この絶対をいただいているということなんです。神さまという絶対の中に入ってしまったって、

「父と我とは一つなり」

「お父さん（神さま）と私は一つです」

と言ったじゃないですか。ところが、イエス・キリストというひとは、まぎれもなく我々と同じ受肉者で、よく分かる。彼が言ったり為さったりしたことは全部、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの福音書に書いてある。これは「色」の世界なんです。色の世界に「空」が現れている。だから、色即空であり、空即色である。「空即色、色即空」という、絶対を相対において完全に現していたひと、これはキリストだけです。

だから、キリストを見ると、あの『般若心経』は私たちが一番よく分かるんです。言葉は難しいけれども、言葉の意味さえ分かれば、中身はスーッと読めてしまう。中身は仏教



者よりもよく読めてしまう。この福音の世界は凄いですよ。

「そうか、私は仏教がだいぶ好きなんだが、困ったな。どっちにしようかな」

なんて、「どちらにしようか」ではない。福音の世界に入ったら、仏教を全部つかんでしまおうから。それはもう、真言であろうと、天台であろうと、浄土であろうと、浄土真宗であろうと——『歎異鈔』は私は大好きだ——禅宗であろうと、日蓮宗であろうと、本当に福音の世界に入ったら、何だつて分かってしまう。そんなことを言う者はあまりいないでしょ、普通のキリスト教では。

いつか、日蓮宗の坊さんが——私の父は日蓮宗だったから——50周年のときに坊さんにお経をあげてもらった。そして、その坊さんと後で話したら、

「あんたみたいなクリスチャンは初めてだ」

とびっくりしていた。これは本当だよ。私が偉いのも何でも無い。私の中に臨んでくるものはそういうもの凄いのだから。イエス・キリストという宇宙的な、一切を包摂してしまうものです。もの凄い中心を持っているから、またもの凄い円周をもっている。中心のない円周ではない。無限の円周を持っている。福音というのはそういうもの凄いです。今日、いらつしゃった方は本当にいいことをしたよ。滅多にこんなことは普通の牧師さんは言わないから。私はやつと今ごろになって托鉢僧みたいになって、もう遅かったと思う。もつと早くなれば良かったと思う。しかし、僕は本当にこの4月からせいせいしているね。福音の世界を、こんな素晴らしい世界を外れたら、もう他に行くところはないですよ。何がどうなつても、どんな事が起きても、絶対に行き詰まりませんから。

●義と愛

キリストは自分を本当に何ものともしない。

「善き先生」

と言われたら、

「なぜ、私のことを善いと言うか。神さまの他に善いものはあるか」

と。ああいうキリストの言葉をすっかりつかまなければダメなんです。

「キリストは自分を何ものともしなかった。そうしたら、無即無限無量になった」

と。神という無は無限無量の無ですから。神という無限無量がここ（無）へ入つて来た。

「無即無限無量」

というのはそのことなんです。これが本当に

「神を義とする」

ということなんです。神の無限無量が入ってくるこの現象が即ち、愛なんです。義というのは、下から上に向かつて「はいっ」ということ。上から下に向かつて一切を与えているのが、これが愛という。義と愛は方向がちがうだけで、一つなんです。



「どうしようように関係するか」

なんて、今のヨーロッパの神学はみんな分析して、組織とかを考える。私は今度はそういう神学を破るような神学を書くつもりだ。自分でも不思議でしょうがない。どうして、こんなことになったか。しかも、確信ならざる確信が来ているから。これは聖霊が、聖霊の智慧が与えているからです。

「^{うっぱり}梁木を取り除け」

と、キリストは手放しで仰る。キリストは説明なさらない。だから、

「聞く耳ある者は聞くべし」

なんて言う。福音というのは実は難しいんだよ。キリストの言葉は、そのまま受けとつたら、及第する言葉は一つもありはしない。

「それで何が福音か」

と言いたくなる。ところが、秘訣がある。キリストの中に自分を投げ入れると、今度は逆に、この言葉がみんな力になってくる。

「すべし、すべからず」

ではなくて、

「私（キリスト）がさせてやるよ」

ということになる。だから、聖書を読むと、読んでいることが直ちに中に入ることである。それが即ち、祈入なんです。祈り入ること。だから、力が来てしまう。

梁木は^{うっぱり}どこで取つてくださったかというのと、申すまでもなく、十字架です。

●キリストを求める

7 求めよ、然らば与えられん。尋ねよ、さらば見出さん。門を叩け、さらば開かれん。

とある。何を求めてもいいですよ。しかし、キリストを求めることをまず第一にしなかつたらダメです。キリストは無条件にこう言つて、「何を求めよ」と、何も書いてない。

「分かっているではないか、私をだよ」

ということ。キリストを求めれば、必ず与えられます。尋ねれば、必ず見いだします。門を叩けば、必ず開かれます。口語訳聖書では、

「与えられるであらう」

なんて訳してある。ダメだよ。「であらう」なんて書いてあつたら、「である」とみんな直してください——なにも書き直さなくてもいいけれども——読むときに、そういう気持で読んでください。だから、私は口語訳聖書は嫌いなんです。「であらう」なんて言うから、

「そうでないこともあるだろうか」

なんて思う。それが信仰の世界ですか。信仰の世界は全部、現在完了です。成るんです。



現在ないし現在完了です。三人称で書いてあつたら、一人称に直して読んでください。「直して」というのは何も筆で直さなくたっていいよ、気持の上です。一人称・単数。それから自然に複数になるけれども。まず一人称・単数・現在として読む。相手はキリストです。もうはつきりしているんだ。その角度で聖書を読めば、もうグングン読めてくる。だから、「信は現なり」
と申し上げている。信仰の世界は現在である。信ずるとは現に持つことなんです。
「祈りたることは聴かれたりとせよ」
とキリストも言っておられるではないですか。

●キリスト中心の求め

非常にはつきりと書いてあるところがある。ヨハネ伝15章7節に、

「汝等もし我に居り、わが言なんじらに居らば、何にても望みに随いて求めよ、

然らば成らん」

「何でも求めなさい。成るよ」

と。その時にキリストが、

「もし我に居り、わが言なんじらに居らば」

と言う。キリストの「私」というものと、「私の言」というものは、キリストでは一つですよ。これは同じことです。「私」というものと「私の言っている言」——また、これは「私の行い」「わが行」でもいい——キリストという「われ」は、口に発しては「言」となり、手足に発しては「行」となるだけのなしです。言と行とは元は一つなんです。現れ方が違うだけのはなしです。普通は、

「言うは易く、行は難し」

なんてやっているよ、一生懸命で。

「なかなか、どうも実行できません」

なんて。百年たつたつてダメだよ、そんなのは、くたびれてしまう。終いには、ごまかしてしまふ。言行一如です。人間というやつはダメだから、百%にはいきません。いかなくてもいいですよ、質が本ものであれば。

「もし、私に居るならば」

と、「もし」なんて言つても、これはキリストは

「私に居なさい」

ということですよ。

「私の言葉を百%に受けなさい。わが言は霊なり生命なりだから」と、キリストは言っておられる。意味ではないと。

「これはどういう意味ですか？」



と、すぐ「聖書研究会」というのは、意味ばかり詮索している。終いには、くたびれてしまふ。それで、結論もでないで、お終いだ。意味ではない。響きだ。響きを受けとらないで、何が意味だ。響きは即ち

「靈なり生命なり」

なんです。

「靈の響き、生命の響きを受けとらないで何だ」

と言うこと。私の話もそうです。これは響きですよ、意味ではないから。そうしたらば、

「私がお前の中にいれば、何でも求めてごらん」

と。「何でも求めてごらん」ということは、入ってしまうと、下らないことは求めなくなってしまう——下らなくなつていいよ、下らないことでも構わないが——それがキリスト、心の求めになるんです。自己中心でなくなるんです。それが神の栄光の現れとしての質になつてくる。だから、そういう祈りは叶えられる。

金儲けしたいと思えば、お願いしたつていいよ。しかし、その金儲けは、

「神さま、お金が来たら、私はこういうこと（福音のため）に本当に使いたいんです」

という、そういう祈りになつていく。それは聴かれる。金を儲けて自分の享樂のことを考えたら、どつこいということになる。

私有も共有も全部これは「神有」、神の有です。私有財産とか、共有財産とかがあるが、その奥は神有である。民主主義でそういうことを言うかい。いわゆる民主主義では言わないでしょう。私のは神主主義なんだ。神主ではないよ。

「神主か。あれはそうすると神道か」

なんて。けれども、これは本当の意味での「神道」、神の道だ。

●キリスト主体

だから、先ほどの7章の始めの方だつて、キリストの中に入ると、これが楽に読めてしまう。

「十字架でもつてお前の我執は全部、私が十字架させてしまった。十字架で引き受

けて、贖つてしまったから、過去・現在・未来のお前はもう、相対的なお前も

う問題ではないんだ。そんなものを問題にするな。絶対的な世界を問題にして動け」

ということになる。キリストという絶対界を、絶対主体を——これをキリスト主体という

——この絶対を問題にして動いていく。そうすれば、

「お前は本当の色となるぞ、本当の証人となるぞ」

と。「本当の証人となる」というのは、この「空」が現れる「色」となつてくるということ

です。キリストはその「色」の最たるものだ。キリストというひとは神さまという「空」を現した最たる「色」なんです。

「空即是色、色即是空」



というあの言葉が、キリストにピタリと来る。現象界が本体界と相即している。ズレがきてない。

ここにバラの花があるけれども、この葉も花も全部、太陽という絶対の光を受けて、こういうようになっていく。太陽がなかったら、こうならない。これは太陽の証者なんです。

「我は太陽の証者なり」

と、このバラが言っているんだ。他の花だってそうです。現れ方は、「色」はもろもろの「色」だよな。いろいろな現れ方をしている。それこそ、本当に色だ。いろんな色いろをしている。バラだって、赤やピンクや白やいろいろあるでしょ。でも、現象は、色相はいろいろだけれども、全部、絶対なるものが本当に現れているということ。

あなた方一人ひとりが、みんな顔がちがう。けれども、生涯を通して為すことやることはみんなそれぞれ天下一品の課題をいただいてやっている。みんな類型的に同じことをするのではない。これが大きな調和、ハーモニーという。第九シンフォニーという素晴らしい交響楽も、それぞれの楽器とそれぞれの音が微妙に組み合わせられて成っているでしょ。人間の世界もそのようにして大きな有機体となる。

みんなが大学生になったら、どうするんですか。

「私は手仕事がうまいから、手仕事をやる」

と、大いにやったらいいんですよ、弟子入りして。私はD中学・高等学校でも時々そのことを言ったんです、

「何も大学、大学と言うことはない。自分の本当に好きなことがあったら、そこへ行って、弟子入りしたらいい」

と。高校を中退してバイオリン造りをやって、ドイツでバイオリンのマイスターシヤフトをもらった人がいる。そんなもんですよ。日本人の考え方は本当に間違っている。社会が、

「大学卒だ」

なんてくだらないことを言うから。みんな実力主義でいけばいい。それぞれ

「お前はこういう実力がある」

と。それをどしどし適材適所で使っていけば、そんな無理はいかないんです。

「入学試験だ」

なんて、くだらない大騒ぎをしないですむ。とにかく、小学校から塾通いで青い顔して、もう卒業する頃は頭が疲れてしまって、みんなおかしくなってしまう。ドイツ人がこないだ私に言っていましたよ、

「卒業する頃にはくたびれてしまうのではないですか」

と。その通りだと言ったよ。日本という国は無駄なことが多いね。哲学的宗教的な頭の文部大臣が大いにその大改革を、本当はしなくてはいいかん。皆さん、この福音を得たら、それぞれの世界で本当に光ってくるんですよ。



「あいつはやっぱり違うな」と。

●十字架と聖霊

この「うっぱり梁木」が取れてしまうから、今度は人の目から小さなものも取り出してあげるこ
とができる。今度は、審くのではない。取ってあげる。

「お前は、そこにゴミがあるよ」
ではない。

「ゴミを取ってあげましょう」

なんだ。愛として働いていく。

「我れキリストと共に十字架されたり。我れ生く、されどもはや我れにあらず。

キリスト、わがうちに在りて生きたもうなり」(ガラテヤ2・20)

とパウロが言った。

「キリストわがうちに」

とは何ですか。聖霊のキリスト、キリストの聖霊です。「十字架ぬきの聖霊」というものは
ありません。もし、十字架ぬきの聖霊があるなら、地上にいた時にキリストが弟子たちに
聖霊を与えたはずだ。聖霊の力は一時的には働きました。けれども、すぐにダメになった。
ペテロがはつきりそのことを現した。

「お前たちは躓く。みんな私を棄てる。蜘蛛の子を散らすように散ってしまう。け
れども、今に集めるぞ。私が受くべき十字架にかかって贖罪を遂げたら、今度は
私が霊を、助け主を与える。聖霊を与える。それで立ち上がる」

と。だから、

「十字架、十字架」

と言ってキリスト教は一生懸命でやっていて、どうして聖霊の世界に本当に入って行かな
いか。それは十字架がまだ本ものになっていないから。観念だから。それは観念十字架だ。

「本当にキリストの十字架で自分はぶつとんだ。現在も過去も未来もありはしない。

そのように自分はキリストに完全に我執から贖い出された。相対的な人間小池が
どうであろうと、そんなことは問題じゃない」

と。それが問題なら、キリストの十字架は相対的な十字架ですよ。絶対的な贖いの十字架
はこちら側の如何に関わりない。100%の贖いですから。相対的な私がどうであろうと、そ
んなことは問題ではない。そこに聖霊が臨んでくる。そのように十字架を受けるならば、
必ず臨んでくるんです。そのことを私は体験したから、申し上げているわけです。

私が育った無教会にはこの世界が本当に現じていない。そこに無教会の限界がある。今
でも、新しい人が、若いひとが本当にそこを突破したら、

「やっぱり、小池の言っていることは本当だ」



と言ってくるわけです。まだ、そういう声を聞かないもの。相変わらず、

「内村鑑三先生。十字架、十字架」

とやっている。内村先生を私は批判しているわけではない。内村先生には火花が散っていた。けれども、そこまではつきり仰るところが少なかった。残念です。内村先生も霊的現象を非常に警戒された。ダメです。

現象の奥の根源現実の世界になったら、聖霊を受けたら、現象は自由自在ですから。

「どういう現象が起きたからどうのこうの」

なんて、そんな問題はなくなる。霊的な現象のことです。それだったら、

「どうして、福音書や使徒行伝の驚くべき霊的現象に対して一般のキリスト教界が

文句を言わないか」

と、私は言いたい。それはそつとしておいて、似たようなことが起きると、「どうだこうだ」と言う。何を言うか。私たちはまだまだとても、この福音書や使徒行伝の、もの凄い現実に対してはまだ、まだです。質的には分かっています。ある時には、質的には来てます。けれども、限りなく、神さまは、キリストは私たちを通して展開をなさろうとしている。いろいろなことを通してなさろうとしている。

●門の向こう側は聖霊の世界

だから、

「求めよ、尋ねよ、門を叩けよ」

というのは、

「キリストを求めろ、キリストを尋ねろ、キリストの門を——「我は門なり」と言

われた、十字架という門を——体当たりで叩け」

そこへぶつ倒れろと。そうしたら、門の向こう側へ行くと、門の向こう側は詩篇23篇みたいなあの素晴らしい聖霊の空間の世界になる。

「聖霊」と言うと、体験していかないものだから、なにか、妙なわけの分からないようなことを言っている。内村先生もあやふやなことを書いています。あるところでは、内村先生は分かっているかなと思うようなことを書いているところもある。けれども、どっこいなんだよな、やっぱり。あれはちよつと一時的な興奮で書かれたかなんか知らんけれども。私が親しく教わった藤井武先生も残念ながら、まだ手前だった。

先生の実存は素晴らしかった。そういうことは私は決して尊敬を惜しみません。けれども、使徒たちの次元からは、惜しいなと思う。内村鑑三、藤井武、塚本虎二なんていう無教会の第一流の先生方に、私は相前後してついでにきたからよく知っている。

その「求めよ、尋ねよ、門を叩け」よりも、はるかに素晴らしい意味で、キリストの方で、求め、尋ね、私たちの魂の扉を叩いておられる。これを言っているのはキリストなんだよ。



キリストは

「私を求めよ、私を尋ねよ、私という門を叩きなさい。私は開いて、お前を入れてやる。この通りだ」と。だから、

「神さまはどこにあるか。いるかいなか？」
 なんて、何を言っているかと。福音書のキリストに来てください。これが神という「空」の「色」なんだから。現象体なんだから、キリストは。神の体現体なんだ。身体で現している体現者です。

●宗教の原始力体

旧約聖書のエレミヤ記29章11節から、

「¹¹エホバいいたもう、我が汝らにむかいて懐くところの念は我これを知る。すなわち災いをあたえんとあらず、平安を与えんとおもう、また汝らに後と望みをあたえんとおもうなり。¹²汝らわれに呼ばわり往きて我にいのらん。

我汝らに聴くべし。¹³汝らもし一心をもて我を求めば我に尋ね遇わん。」(エ

レミヤ29・11～13)

と書いてある。

「平安を与えよう」

と言う。「シャローム」というヘブライ語は、ヘブライ人は挨拶でも——「こんにちは」でも「さよなら」でも何でも——しょっちゅう言う。

「シャローム」というのは「平安」です。「平和」ではない。「平和」という言葉も「シャローム」と言えますけれども。「神・キリスト・我」の関係が正しく立って、この義と愛の貫きのあるところが「平安」なんです。それから、人に対して——人を助けることが人を愛するということですから——お互いに助け合うところが「平和」です。助け合いがなかったら、お互いさまこれは平和ではない。「平和、平和」なんて言うけれども。

ブレジネフとカーターが会談している写真が出るね。お互いにちよつと一応、ニコニコしたりしている。なぜ、心の底から本当に笑って喜んで、

「もう、戦争なんかよそうじゃないか」

と言えないのか。核兵器のある種の制限だけでお終いだなんて。なんと人間は戦争という亡霊、悪霊のとりこになっていることだろう。ケタちがいの政治家が出てこないものかな。みんな政治家だ。グラッドストーンとか、リンカーンとか、あれだけの魂が本当に欲しいね。

人ごとではない。皆さんお一人おひとりがキリストで白熱の人になってください。そのひと一人の存在がどれほど大きな力であるか。本当の原始力です。キリストという原始の力。我々は原始力体にならなくては。物理の原子力時代ならば、我々は宗教の原始力体になら



なかったら、おさまりはつかない。いい加減な信仰だったら。

「はいっ、もう私はそうになりました」

とはつきり言えませんか。

「はて、成っただろうか。成るには大変だろうか？」

なんて——大変もヘツタクレもないですよ——「こつち側」なんか考えているからダメなんだ。「キリスト一切」なんだから。

「自分は何ものでもなくていい」

と言うんだから。こんなありがたいことはないじゃないですか。

「もう少し聖書を勉強しろ」

だとか、

「もう少し人を愛してから、もう少し何々をしてから」

という条件付きではない。無条件なんだ。

「絶対無条件で、あるがままそのまま、今直ちに」

という、そういう世界です。

私はちよつと異言がでそうになったから、今ちよつとこらえた。そういう、有難くて、楽で、そして本当に人に伝えざるを得ない世界です。

信仰も何もない人でも、神経痛で少し手が痺れたりする人に、私はちよつと手を置いて15秒くらい黙って祈って、

「はいっ、治りました」

と言う。そうすると、その人は治っているんだ、びっくりしている。そういうように、皆さん一人一人をいくらでもお使いくださる。大袈裟に「ワツシヨイ、ワツシヨイ」なんて祈らなくなつて、力が働くんです。福音書のキリストを見てごらん下さい。キリストはでつかい声で——それはある時は大きな声で叫びますよ——けれども、繰り返しして「ワツシヨイ、ワツシヨイ」というような祈りはしない。直ちに働いてしまう。もの凄い。イエス・キリストの次元は大変な次元です。

● 百分に降参

福音書を読んだら、キリストに百分に降参しなければ、この世界には入れない。

「参りました (降参しました) !」

と。そうしたら、

「お前をその世界に入れてやるよ」

と言われる。

「こういうことがあるでしょうか、ないでしょうか？」

なんて、ただそんなことで聖書の世界には絶対に入れない。これははつきりしている。魂



の世界は絶対にごまかしはきかない。いいですね。そういう気合で身体からだで身読しんどくする。身体で読む。これは日蓮の言葉です。いい言葉だ。身体で読んでください。目でもない。耳で聞くでもない。全存在をもって聞く。全存在をもって見る。全存在をもって捕まえられる。全的なんです。キリストに全的に向かってくる者は皆、キリストは本当に喜んで迎える。あのザアカイが、キリストとはどんな人かと思つて桑の木によじ登ったら、キリストが、

「お前の家に行つて、今日は泊まるぞ」

と言われた。ちゃんと、ザアカイの心を見抜いてしまっている。あの桑の木によじ登ったのは、100%だ。キリストを求めた。

また、我々はどこでもキリストにはでつくわすことができる。私はいつか、

「一極絶対」

ということを書きました。これも要するに、一極絶対なんです。

「右の手のすることを左の手に知らせるな」

という。左手を知らざる右手なんです。これが一極絶対の姿です。

「お前はよく私を愛してくれた。水を一杯くれた」

「いえ、上げたことはありません」

「いや、いと小さき者に水をやったのは、私にくれたのだ」

と。善を意識しないで自ずからやっているのは、一極絶対の姿なんです。超道徳の世界です。

「善なるか、悪なるか。こうしようか、ああしようか」

と選んで、選択してやるのは道徳の世界です。それを突き抜けて、

「せざるを得ず、自ずから為す」

というのが福音の世界です。せざるを得ずして、止むにやまれずして動く世界、これが福音の世界です。上からの力です。これは聖霊です。そのように動かなければ、自分はやりきれない。「選択えらび」ではないんです。霊法が——

「活ける生命いのちの法のり」

とパウロがロマ書8章2節で言っているが——そのキリストの生命の法が自ずから働く世界、これが一極絶対の世界です。自分を自分とも思わない。相手も相手と思わない。自然に動いている。

●真理の最高の表現はドラマ

「敵を愛せよ」

という。敵というやつは、しゃくにさわるよ。私もたくさん敵をもっている。けれども、しゃくにさわるという同じ次元にいたら、ダメなんです。次元をもうひとつ別なところに置かないと。担いのどん底に置く。相手を担う。

幾人もの人が私に背いて出ていきました。人間小池はダメな野郎だから出て行つたって



いい。けれども、可哀相だなあとと思う。私はそういう人たちの写真を見ては時々祈っている。写真がたくさんあるから。本当にキリストに立ち帰ることを祈っている。私の所なんかに来なくなっていたいい。時々、人から何か妙なうわさを聞くと、本当に情けなくなるね。本ものを受けそこなっているからです。本ものを受けとつていけば、もし私が何かに躓いたら、「よし、先生をひとつ担いで行きましょう」

と。それが本当の師弟関係だよ。
「あつ、先生が躓いた。あの先生は当てにならないな」
なんていうのは、これは

「人を審く」

ということだ。私がまた弟子に対しても、もしそれをやったら、ダメです。お互いに本当に担いで行くことは、本ものを持つているなら、それができる。これが本当のアガペーの愛という。「アガペー」なんていう言葉はどうでもいいけれども。

神さまの愛はいろいろな形で表れます。ある時は、怒りになって表れる。そういうことは、もう言葉では言えないんです。だから、真理の最高の表現は結局、ドラマになる、劇になるんです。ということは、聖書そのものがドラマなんです、劇なんです。同じ平面に持つてくると、矛盾したような言葉がたくさんある。矛盾したような行為すらもある。けれども、これは非常にドラマチックな構造になっている。それを「組織神学」なんていうもので、聖書の真理はまとめられるものではない。だから、内村先生が神学というものをあまり好まなかった。その気持は結構です。結構なんだけれども、私はいわゆる神学を破るような神学を書いてみたいと思う。それは神学ではないかも知れない。

「本当の芸術は芸術を笑う」

と、ロダンが言った。その通りです。とにかく、本ものは大体、人に受けとられない。

「本ものというものは万人が受けとることができるが、しかもそれを受けとりがたい」という、妙なものだね。無条件の世界だから。

●空気は無条件

皆さん、条件をもつて、空気を吸っていますか。空気は無条件に吸っている。無意識に、寝ていても吸っている。空気と我々くらい密接な関係にあるものは、この相対的な世界では他にないでしょ。「空気」という言葉はおもしろい。「空」なるもの、「気」なるもの。これはみんな「霊」と通ずる字です。肉体も気を、大気が必要とする。大気とか、天気とか言うところ、この気がおかしいと、「病気」という。病気の根源は心の具合が悪いことから始まる。外から来る病気もあるよ。けれども、病気の本質は気が病むことです。気が病むのは、健やかになると自ずから治ってしまう。ところが変な気持になると、同じものを食べてもご飯がおいしくはないではないですか。気分が良ければ、たくわんとご飯だっておいしい。



海老を出されたって、気分が悪かったら、かえって害になるよ。病気も気の世界です。

藤田東湖の「天地正大の気」という有名な歌がある。

「天地正大の気、粹然として神州に鐘る」

秀でては不二の嶽と為り、巍々として千秋に聳ゆ

注いでは大瀝の水と為り、洋々として八州を環る

発いては万葉の桜と為り、衆芳与に儔ひ難し

凝つては百鍊の鉄と為り、鋭利兜を断つ可し。」

藤田東湖は富士山も気によってできたとか、この大海も気によってできたと、素晴らしいことを言っている。栄西も心の世界でもの凄いことを言っています。

要するに、この気は、一番根源は神の聖霊ですから。キリストは私たちに聖霊を与えようとして、あの実存をなさり、十字架に懸かり、復活され、そしてついに聖霊をくださった。

聖霊のバプテスマのないクリスチャンなんていうものはクリスチャンではないんだ、水の洗礼ばかりやっけていて。私はドイツへ行ったら、牧師が

「洗礼を受けましたか？」

と聞くから、

「私は洗礼は受けません。ただ上から直接に来ました。私は霊の洗礼を受けています。キリストはそう言ったではないですか」

と言ったら、びっくりしていた。向こうのプロテスタントの牧師さんが私に歯が立たない。「どうして、そういうことになりましたか？」

なんて聞く。

ザビエルという伝道者は素晴らしい。彼は本当に聖霊の器です。でなければ、あれだけの驚くべき多くの改宗者はできないわけです。

●無限無量の聖霊

そういうことで、求めるものは、キリストを求めるのだが、それはキリストから来るところの聖霊なんです。だから、その後の方に書いてある。

9 汝等のうち、誰かその子パンを求めんに石を与え、10 魚を求めんに蛇を与え

んや。11 然らば、汝ら悪しき者ながら、善き賜物をその子らに与うるを知る。

まして天にいます汝らの父は、求むる者に善き物を賜わざらんや。

キリストが「善き物」と仰った、この「善き物」とは聖霊のことです。これはルカ伝に「天の父は求むる者に聖霊を賜わらざらんや」

と書いてあるとおりです。聖霊を受けるのは、十字架の贖いを本当に受けとって、自分がもうすっかり問題なき者にされていると、この十字架の贖いに感激すると、聖霊がやってきますよ。真空にはしておかない。無即無限無量のこの「無限無量」が聖霊なんです。十



十字架で「無」とされました。罪のない、無罪とされたら、そうしたら、即無限無量というのは、この「無限無量」は聖霊ですから。聖霊は無限無量の内容をもつて、自在にその人にふさわしく働きたもう。これはコリント前書12章、14章に書いてあるとおりです。そして、聖霊の一番の本質は何かというと、コリント前書13章の「愛」ということになってくる。あれは聖霊の愛です。

「**凡そ事^{おおよ}忍び、おおよそ事信じ、おおよそ事耐うるなり**」(コリント前13・7)

と。聖霊の愛でなければ、それだけのことはできません。これは何も難しくはない。我々の中にいくらでも、楽に入ってくる。

私は長いこと無教会にいて、まあご苦労さんだったよ、考えてみると。けれども、1950年11月3日から5日に手島さんと阿蘇で集会をやって、上から聖霊が来てしまったからしょうがない。彼も行き詰まって、手島さんにとっても、私にとっても、あれがペンテコステだったんです。

彼と私は随分、人間が違う。彼は勇敢にやることをやって、もうさっさと向こうへ往ってしまった。私は鈍器で呑気だから、ちよつとまだ時間がかかる。時間はかかるけれども、私は私のすべきことがあるからね。

手島さんのグループの人たちも、ただ彼の写真ばかり掛けて——なにも私は悪口を言うわけではないけれども——なぜ、キリストの写真を掛けないんですか。そんなことをやっている、彼だつて怒るぞ。ダメだよ。『生命の光』だつて、手島さんのものばかり先ず載せて——それも悪くはないけれども——自分たちの本当のいろいろな種類の証^{あかし}をのせたらいい。ちよつと典型的になっているね。悪口を言うのではないですよ。皆さん結構です。よくやっています。けれども、もつとそれぞれの多様性をもってキリストに直結して行つていただきたい。

そういうことで、結局、求める内容は、キリストの中に祈入して、そして聖霊を受ける。キリストと一つになったら、聖霊は必ず来ます。その土台は十字架ですから。十字架という土台を通つてそこへ行けば、今度は、皆さんが具体的に求められることは、そこで力を得て、展開していく。

「**為^せんかた^の尽くれども、絶対に希望^{のぞみ}を失わない。倒されても滅びない**」

と、パウロが言っているとおりに、百難を突破して進んで行く。

そういうことで、皆さんと本当に——聞くも語るも同じこと——このキリストの中に入ったことを感謝いたします。

